

S.C.WORKS 今週のスタディ！

【ヘッドライン】

- 1) 「福井県産そば 100%、具は若狭牛のカップ麺発売」
- 2) 「“ジャマモク”と言われた海藻“アカモク”を活用した加工食品続々」
- 3) 「スタイリッシュ！公衆トイレが“高級ホテル”に変身」

1) 「福井県産そば 100%、具は若狭牛のカップ麺発売」

JA 福井県経済連は、作付け面積全国 3 位のそばと若狭牛を使ったインスタント食品「若狭牛そば」（税込み 400 円）を発売した。

県内の A コープやスーパーのほか、インターネットでも扱っている。年越しそばなどでの需要を見込み、年内に 3 万個を出荷する。

麺は 100% 県産のそば粉を使っており、冷凍後に乾燥させる製法で生に近い食感に仕上げた。かつおだしのつゆは上品な薄味で、お湯を入れた後に乗せる若狭牛の甘辛さがアクセントになっている。

JA 県経済連が進める県産農産物を使った加工食品シリーズの第 1 弾。第 2 弾として、トマト「越のルビー」を使ったレトルトカレーなどを開発中で、担当者は「『福井の食卓シリーズ』として、ギフト需要も狙いたい」としている。

ご当地食が全国的にプッシュされているが、手軽に食べられるカップ麺タイプということで幅広い世代の目に届きやすいただろう。はやりの B 級グルメというくくりではなく、100% 地元産の食材を使うという点でまた違ったアピールができそうだ。あまり体に良いイメージのないカップ麺だが、信頼できる食材を使うことでそのイメージも払拭できそうに思った。

2) 「“ジャマモク”と言われた海藻“アカモク”を活用した加工食品続々」

「ジャマモク」と異名を持つ海藻の「アカモク」を活用しようと志摩市商工会が新事業に取り組んでいる。

アカモクは、ヒバマタ目ホンダワラ科に属する海藻で、ワカメやアラメ、コンブと同じ褐藻類。生命力が強く最大で 7 メートルに成長する一年藻。秋田や山形、新潟では食用に採取されているが伊勢志摩地域では食用とされず、「流れ藻」として刺し網や船のスクリューなどに絡み付き被害を与えることから「ジャマモク」「ダメモ」などと呼ばれ海の厄介者として扱われていた。

しかしながら近年、アカモクの研究が進み、カルシウムはコンブやワカメの 1.2 倍、鉄分はワカメの 5.2 倍、カリウムはワカメやヒジキの 1.6 倍とミネラルが豊富で、光合成によって植物に含まれる色素や苦味のもととなるポリフェノールや植物繊維の一種で抗血作用凝固作用活性、コレステロール低下作用、抗腫瘍効果があることで知られるフコイダン、カルシウムが骨から溶け出すのを抑制する効果のあるビタミン K など機能性成分が多く含まれること

がわかってきた。そのため、アカモクを水産資源として活用しようと全国各地でさまざまな取り組みが行われている。

同商工会では今年6月、地域力活用∞（無限大）新事業全国展開プロジェクト「志摩の里海・完熟天然あかもく」三方よし型特産品開発事業をスタートさせた。7月に第1回の作業部会を立ち上げ、粉末や冷凍のアカモクの活用方法、成分について研究、試食会などを実施。10月15日には、同23日・24日に東京ビッグサイトで開かれる「2012 地方銀行フードセレクション」に出品する4品（アカモクをつなぎ代わりに使用したハンバーグ、アカモクの粉末を使ったロールケーキ、刻んだアカモクをゼリーと重ね合わせたプリン、粉末をカマボコに混ぜ麺状にしたものにアカモクを刻んでとろろ状にし掛けて食べる商品）の試食会を開いた。

同商工会事務局は「これまで邪魔者扱いされていたアカモクがお金になり、食べられ、さらに機能性食品として注目されれば。この事業を通して、伊勢志摩地域でもアカモクがたくさんの人に認知され食べられるようになれば」と期待を込める。

今まで厄介者扱いされているものでも、何か有効活用すれば有効な資源になるという話を良く聞く。度々大量発生するエチゼンクラゲもそうだが、海産物として扱う事で食料になるということが話題に取り上げられている。そのほかにも、バイオ燃料など食以外での活用法の研究も進めばかなり効果的な取り組みになりそうだ。

3) 「スタイリッシュ！公衆トイレが“高級ホテル”に変身」

公衆トイレが高級ホテルに---。大阪市北区の中之島公園周辺で開催されているアートイベント「おおさかカンヴァス」で、同公園内のトイレが「中之島ホテル」として“開業”、事前の応募で当選した希望者が宿泊を楽しんでいる。

おおさかカンヴァスは、大阪の街をキャンバスに見立て、さまざまな芸術作品を発表する場とするアートイベント。今回は124点の応募があり、その中から選ばれた10作品などが中之島公園を中心に披露されている。

このうち、中之島ホテルを制作したのは、ベルリン在住のアーティスト、西野達さん。「中之島の真ん中でロケーションもよく、きれいなトイレだったので…」と制作の動機を話す。床を磨いたり臭いを減らしたりしたほか、防音設備を整えるなどして1週間をかけて、トイレの一部をホテルに“改装”。設置した家具は全てヨーロッパ製で、宿泊者が使うタオルは「泉州タオル」と“大阪産（もん）”にこだわった。各備品には、西野さんがデザインした「中之島ホテル」のオリジナルロゴを入れた。

また、案内役は、リーガロイヤルホテル大阪で研修を受けた大阪観光大の学生が担当している。

宿泊の事前募集には42人が応募し、当選した人たちが21日までの期間中、1日1組ずつ宿泊。13日に宿泊した大阪市北区の会社員、森克典さんは「おもしろそうだったので応募した。部屋はスタイリッシュで、特に何の問題もなくぐっすり眠れた」と話していた。

「ホテル内のトイレを改装」はありふれた話だが、「トイレをホテルに」というのはかなりインパクトが強い。まさかいつも使っているトイレが、ホテルに…と驚く人もいると思う。

ホテルとして利用できるほど綺麗なトイレというイメージアップにも繋がりそうで、今までの公衆トイレのイメージによくある汚い・臭いなどを払拭してくれそうだ。